

調査結果の概要

I 発育状態

1 平均体格

平成20年度の幼稚園、小学校、中学校及び高等学校における幼児、児童及び生徒の身長、体重、座高の平均を年齢別、男女別にみると次のとおりである。

(1) 身長 (表1, 図1, 図2)

男子の身長(平均値。以下同じ)は、6歳～8歳、10歳、11歳、13歳、14歳、17歳の各年齢で前年度の同年齢よりも増加している。各年齢間の身長差が最も大きいのは、12歳～13歳の7.5cmとなっている。

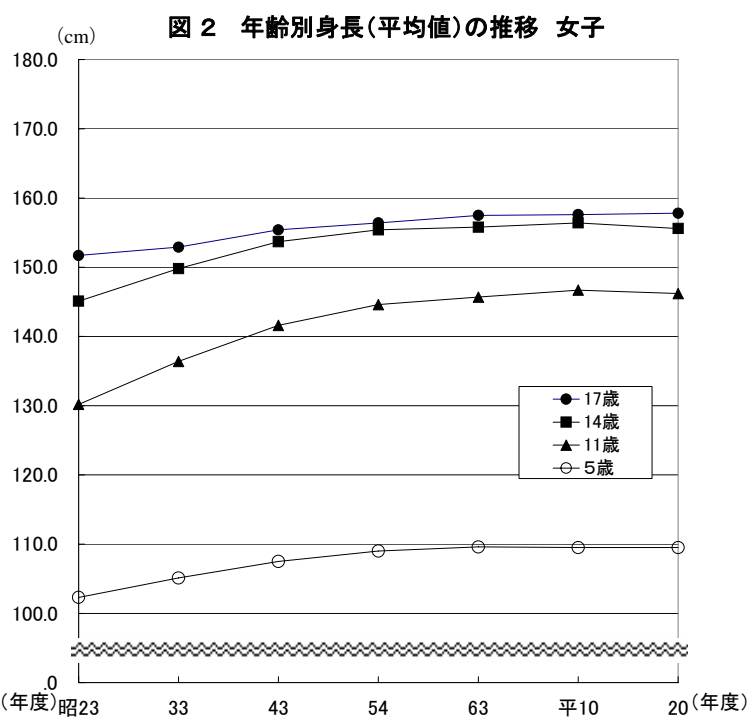
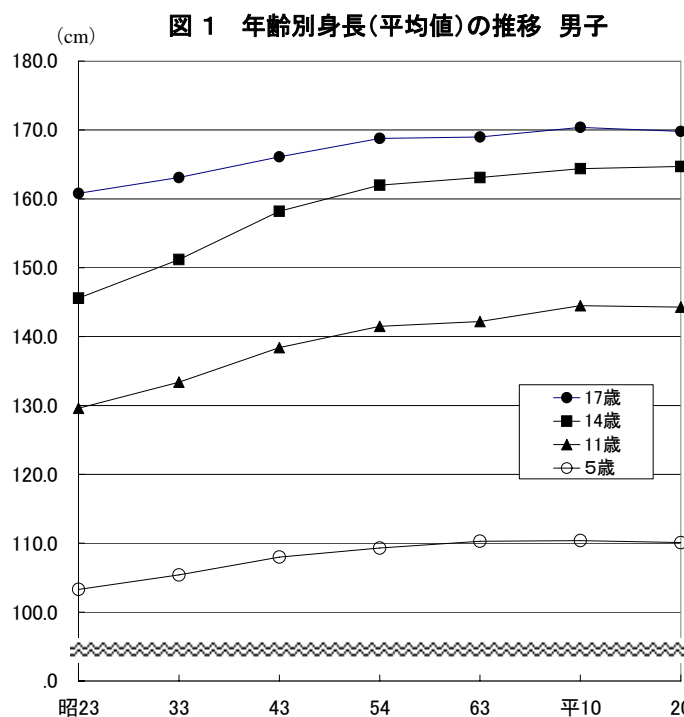
女子の身長は、6歳～9歳、13歳、16歳、17歳の各年齢で前年度の同年齢よりも増加している。各年齢間の身長差が最も大きいのは10歳～11歳の7.1cmとなっている。

表1 男女別年齢別 身長(平均値)

(単位: cm)

男女・年度		幼稚園	小学校						中学校			高等学校		
		5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳
男子	20年度	110.1	116.4	122.2	127.5	133.4	138.6	144.9	151.8	159.3	164.7	167.8	169.0	169.8
	19年度	110.4	116.0	121.6	127.4	<u>133.7</u>	138.1	144.3	<u>152.2</u>	158.8	164.2	<u>168.1</u>	169.5	169.6
	差	△0.3	0.4	0.6	0.1	△0.3	0.5	0.6	△0.4	0.5	0.5	△0.3	△0.5	0.2
女子	20年度	109.5	115.5	121.1	127.0	133.0	139.1	146.2	151.2	154.6	155.6	156.8	157.3	157.8
	19年度	110.0	115.4	121.0	126.4	132.9	<u>140.5</u>	<u>146.7</u>	151.3	154.4	156.2	156.8	156.7	157.3
	差	△0.5	0.1	0.1	0.6	0.1	△1.4	△0.5	△0.1	0.2	△0.6	0.0	0.6	0.5

(注) 下線部は、調査実施以来の最高値を示す。



(2) 体 重 (表2, 図3, 図4)

男子の体重(平均値。以下同じ)は、6歳、7歳、10歳～14歳、17歳の各年齢で前年度の同年齢より増加している。各年齢間の体重差が最も大きいのは、11歳～12歳の6.0kgとなっている。

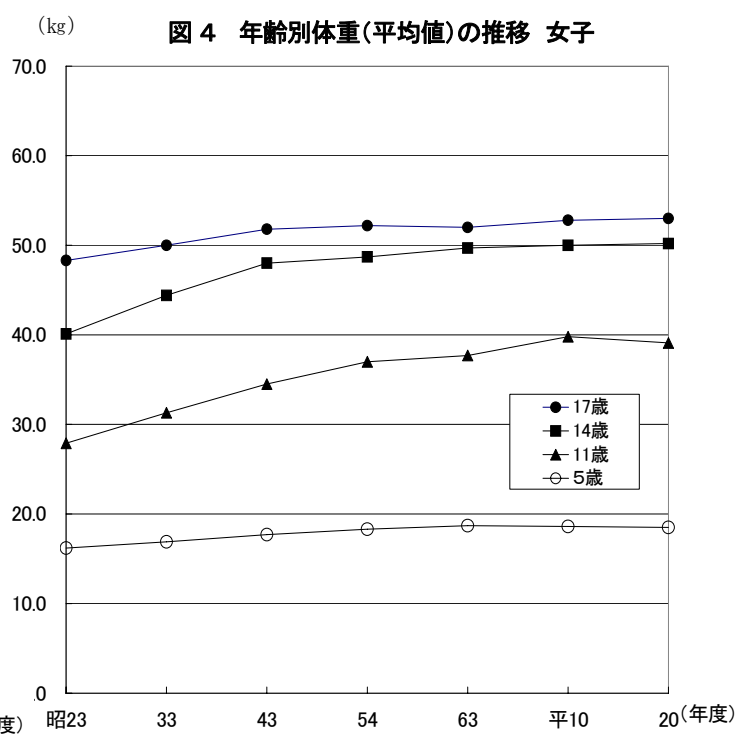
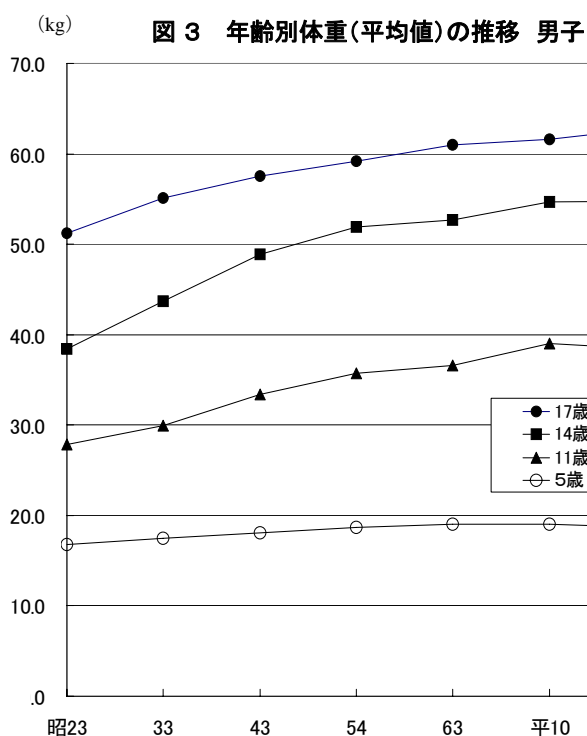
女子の体重は、6歳～9歳、12歳、14歳、16歳、17歳の各年齢で前年度の同年齢よりも増加している。各年齢間の体重差が最も大きいのは、10歳～11歳の5.4kgとなっている。調査開始した昭和23年以降でみると、6歳で過去最高値となっている。

表2 男女別年齢別 体重(平均値)

(単位: kg)

男女・年度		幼稚園	小学校						中学校			高等学校		
		5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳
男子	20年度	18.7	21.4	23.9	26.9	30.5	33.7	38.4	44.4	49.4	54.8	58.9	60.9	62.8
	19年度	19.0	21.1	23.8	27.0	31.0	33.4	37.6	44.1	48.3	53.6	59.5	61.1	62.1
	差	△0.3	0.3	0.1	△0.1	△0.5	0.3	0.8	0.3	1.1	1.2	△0.6	△0.2	0.7
女子	20年度	18.5	<u>21.2</u>	23.3	26.3	29.6	33.7	39.1	44.2	47.5	50.2	50.8	52.7	53.0
	19年度	18.7	20.6	23.2	25.9	29.3	34.5	39.5	44.1	47.5	49.5	51.8	51.7	52.7
	差	△0.2	0.6	0.1	0.4	0.3	△0.8	△0.4	0.1	0.0	0.7	△1.0	1.0	0.3

(注) 下線部は、調査実施以来の最高値を示す。



(3) 座高 (表3, 図5, 図6)

男子の座高(平均値。以下同じ)は、5歳～8歳、10歳、11歳、13歳、14歳の各年齢で前年度の同年齢より増加している。各年齢間の座高差が最も大きいのは、12歳～13歳の3.8cmとなっている。調査開始した昭和24年以降でみると、14歳～16歳の各年齢でこれまでの最高値と同数になっている。

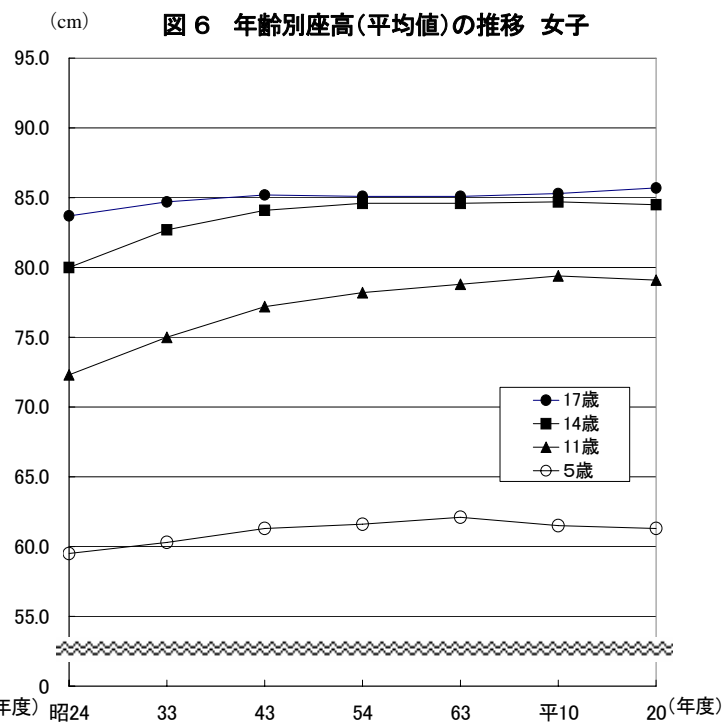
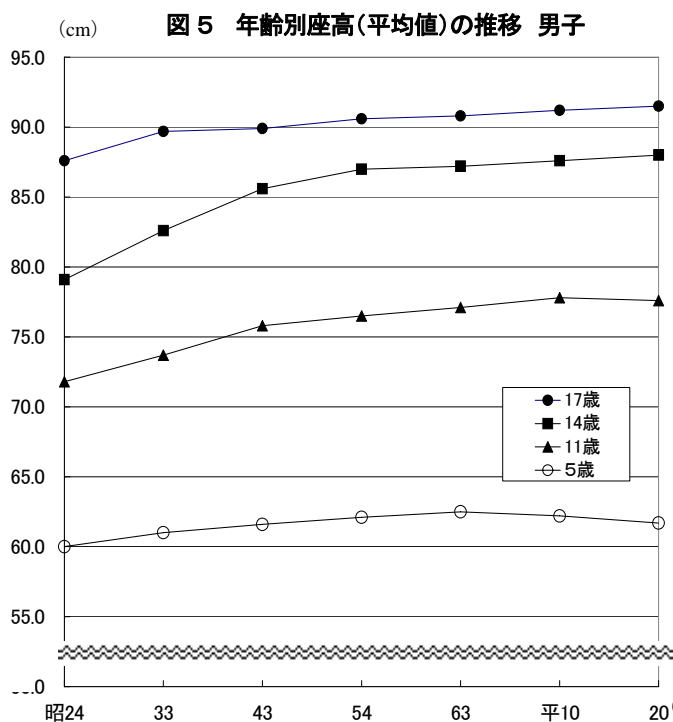
女子の座高は、6歳、8歳、12歳、14歳、16歳、17歳の各年齢で前年度の同年齢よりも増加している。各年齢間の座高差が最も大きいのは、10歳～11歳の3.5cmとなっている。調査開始した昭和24年以降でみると、17歳で過去最高値となっている。

表3 男女別年齢別 座高(平均値)

(単位: cm)

男女・年度		幼稚園	小学校						中学校			高等学校		
		5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	16歳	17歳
男子	20年度	61.7	64.8	67.7	70.1	72.7	74.9	77.6	81.2	85.0	<u>88.0</u>	90.0	91.1	91.5
	19年度	61.4	64.5	67.2	70.0	72.9	74.7	77.4	<u>81.3</u>	84.4	87.5	<u>90.0</u>	<u>91.1</u>	91.5
	差	0.3	0.3	0.5	0.1	$\Delta 0.2$	0.2	0.2	$\Delta 0.1$	0.6	0.5	0.0	0.0	0.0
女子	20年度	61.3	64.6	67.1	70.1	72.5	75.6	79.1	82.0	83.8	84.5	85.4	85.5	<u>85.7</u>
	19年度	61.3	64.3	67.2	69.5	72.5	76.1	<u>79.5</u>	81.9	83.8	84.4	85.5	85.3	85.5
	差	0.0	0.3	$\Delta 0.1$	0.6	0.0	$\Delta 0.5$	$\Delta 0.4$	0.1	0.0	0.1	$\Delta 0.1$	0.2	0.2

(注) 下線部は、調査実施以来の最高値を示す。



2 親世代の体格との比較 (表4)

平成20年度と親の世代である32年前の昭和51年度の体格を比較してみると、男子5歳の座高を除き、身長、体重、座高、すべてにおいて平成20年度で向上している。

男子の身長をみると、最も差があるのは、11歳で、親の世代より3.6cm高くなっている。体重は、12歳及び17歳で4.1kg重くなっている。座高は、12歳で1.8cm高くなっている。

女子の身長をみると、最も差があるのは、9歳で、親の世代より2.3cm高くなっている。体重は、12歳で2.4kg重くなっている。座高は、12歳で1.0cm高くなっている。

表4 親世代の体格との比較

男女・校種・年齢			身長 (cm)			体重 (kg)			座高 (cm)		
			平成 20年度	昭和 51年度	差	平成 20年度	昭和 51年度	差	平成 20年度	昭和 51年度	差
男 子	幼稚園	5歳	110.1	109.2	0.9	18.7	18.5	0.2	61.7	61.9	△0.2
		6歳	116.4	114.8	1.6	21.4	20.3	1.1	64.8	64.5	0.3
	小学校	7歳	122.2	120.3	1.9	23.9	22.7	1.2	67.7	67.1	0.6
		8歳	127.5	126.1	1.4	26.9	25.4	1.5	70.1	69.8	0.3
		9歳	133.4	131.0	2.4	30.5	28.1	2.4	72.7	71.8	0.9
		10歳	138.6	136.4	2.2	33.7	31.6	2.1	74.9	74.2	0.7
		11歳	144.9	141.3	3.6	38.4	34.5	3.9	77.6	76.2	1.4
	中学校	12歳	151.8	148.8	3.0	44.4	40.3	4.1	81.2	79.4	1.8
		13歳	159.3	156.5	2.8	49.4	45.9	3.5	85.0	83.3	1.7
		14歳	164.7	162.3	2.4	54.8	51.2	3.6	88.0	86.5	1.5
	高等学校	15歳	167.8	166.0	1.8	58.9	55.5	3.4	90.0	89.1	0.9
		16歳	169.0	167.6	1.4	60.9	57.2	3.7	91.1	89.9	1.2
		17歳	169.8	168.4	1.4	62.8	58.7	4.1	91.5	90.7	0.8
女 子	幼稚園	5歳	109.5	108.5	1.0	18.5	18.1	0.4	61.3	61.3	0.0
		6歳	115.5	114.1	1.4	21.2	20.0	1.2	64.6	64.2	0.4
	小学校	7歳	121.1	120.0	1.1	23.3	22.4	0.9	67.1	66.8	0.3
		8歳	127.0	125.4	1.6	26.3	25.0	1.3	70.1	69.3	0.8
		9歳	133.0	130.7	2.3	29.6	27.9	1.7	72.5	71.7	0.8
		10歳	139.1	137.7	1.4	33.7	32.2	1.5	75.6	75.1	0.5
		11歳	146.2	144.2	2.0	39.1	36.9	2.2	79.1	78.3	0.8
	中学校	12歳	151.2	149.6	1.6	44.2	41.8	2.4	82.0	81.0	1.0
		13歳	154.6	153.0	1.6	47.5	46.0	1.5	83.8	83.0	0.8
		14歳	155.6	154.8	0.8	50.2	49.0	1.2	84.5	84.1	0.4
	高等学校	15歳	156.8	155.4	1.4	50.8	50.4	0.4	85.4	84.8	0.6
		16歳	157.3	155.6	1.7	52.7	51.5	1.2	85.5	84.9	0.6
		17歳	157.8	156.2	1.6	53.0	52.1	0.9	85.7	84.8	0.9

3 肥満傾向児の出現率 (表5)

平成20年度の肥満傾向児の出現率は、男子では17歳が最も高く、5歳で最も低い。女子は、12歳が最も高く、5歳で最も低い。

表5 年齢別 肥満傾向児の出現率 (単位：%)

校種・年齢		肥満傾向児の出現率(男子)		肥満傾向児の出現率(女子)	
		20年度	19年度	20年度	19年度
幼稚園	5歳	1.41	3.09	4.07	3.15
	6歳	3.65	2.69	4.64	2.36
小学校	7歳	5.79	6.21	6.02	3.92
	8歳	7.34	7.80	4.96	5.47
	9歳	8.72	12.14	7.31	7.62
	10歳	9.45	8.91	8.13	6.77
	11歳	10.69	10.04	9.60	11.94
中学校	12歳	12.98	12.01	11.98	11.92
	13歳	10.73	9.32	9.26	8.72
	14歳	10.78	10.01	10.81	7.57
高等学校	15歳	10.78	12.06	5.45	9.11
	16歳	10.72	8.04	6.10	4.88
	17歳	14.88	11.83	5.69	6.83

(注) 肥満傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上の者である。以下の各表において同じ。

算式は、次のとおりである。以下の各表において同じ。

$$\text{肥満度} = (\text{実測体重} - \text{身長別標準体重}) / \text{身長別標準体重} \times 100 (\%)$$

身長別標準体重は、次表の身長別標準体重を求める係数表のa, bと実測身長により求める。

$$\text{身長別標準体重 (キログラム)} = a \times \text{実測身長 (センチメートル)} - b$$

身長別標準体重を求める係数表

年齢・係数	男子		女子	
	a	b	a	b
5歳	0.386	23.699	0.377	22.750
6歳	0.461	32.382	0.458	32.079
7歳	0.513	38.878	0.508	38.367
8歳	0.592	48.804	0.561	45.006
9歳	0.687	61.390	0.652	56.992
10歳	0.752	70.461	0.730	68.091
11歳	0.782	75.106	0.803	78.846
12歳	0.783	75.642	0.796	76.934
13歳	0.815	81.348	0.655	54.234
14歳	0.832	83.695	0.594	43.264
15歳	0.766	70.989	0.560	37.002
16歳	0.656	51.822	0.578	39.057
17歳	0.672	53.642	0.598	42.339

出典：財団法人日本学校保健会『児童生徒の健康診断マニュアル(改訂版)』平成18年

4 痩身傾向児の出現率 (表6)

平成20年度の痩身傾向児の出現率は、男子では10歳が最も高く、5歳で最も低い。
女子は、13歳が最も高く、6歳で最も低い。

表6 年齢別痩身傾向児の出現率

(単位:%)

校 種 ・ 年 齢		痩 身 傾 向 児 の 出 現 率 (男 子)		痩 身 傾 向 児 の 出 現 率 (女 子)	
		20年 度	19年 度	20年 度	19年 度
幼 稚 園	5 歳	0.16	0.33	0.24	0.22
小 学 校	6 歳	0.41	0.67	0.00	0.93
	7 歳	0.40	0.74	0.70	0.94
	8 歳	0.42	0.69	0.79	0.35
	9 歳	1.49	1.30	1.34	2.11
	10 歳	2.59	2.29	1.44	4.25
	11 歳	2.10	2.54	2.12	1.91
中 学 校	12 歳	1.72	2.10	1.42	2.50
	13 歳	2.27	1.50	2.71	3.31
	14 歳	1.93	1.91	2.21	2.68
高 等 学 校	15 歳	1.99	0.88	1.29	1.15
	16 歳	1.95	0.56	1.07	3.12
	17 歳	1.93	0.68	1.27	0.36

(注) 痩身傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が-20%以下の者である。以下の各表において同じ。

II 健康状態

1 主な疾病・異常の被患率 (表7)

平成20年度の定期健康診断における幼児、児童及び生徒の各疾病・異常の被患率は、いずれの学校段階においても「むし歯(う歯)」の者(処置歯完了者を含む。以下同じ)が1位となり、次いで「裸眼視力1.0未満の者」、「鼻・副鼻腔疾患」となっている。

表7 主な疾病・異常の被患率

順位	幼稚園		小学校		中学校		高等学校	
	検査項目	%	検査項目	%	検査項目	%	検査項目	%
1	むし歯(う歯)	47.1	むし歯(う歯)	60.3	むし歯(う歯)	46.3	むし歯(う歯)	61.1
2	裸眼視力1.0未満の者	16.4	裸眼視力1.0未満の者	28.4	鼻・副鼻腔疾患	7.9	鼻・副鼻腔疾患	7.9
3	鼻・副鼻腔疾患	5.0	鼻・副鼻腔疾患	9.8	歯垢の状態	6.0	歯垢の状態	6.9
4	アトピー性皮膚炎	3.6	眼の疾病・異常	5.6	歯列・咬合	5.4	歯肉の状態	6.5
5	眼の疾病・異常	3.3	歯列・咬合	3.8	歯肉の状態	5.1	歯列・咬合	5.6
6	耳疾患	2.3	ぜん息	3.3	眼の疾病・異常	4.4	眼の疾病・異常	5.3
7	ぜん息	1.5	アトピー性皮膚炎	3.2	心電図異常	3.3	蛋白検出の者	4.1
8	その他の皮膚疾患	1.4	その他の疾病・異常 (歯・口腔)	3.1	アトピー性皮膚炎	3.2	アトピー性皮膚炎	2.8
9	その他の疾病・異常 (歯・口腔)	1.1	耳疾患	3.0	ぜん息	2.9	心電図異常	2.6
10	歯列・咬合	0.9	歯肉の状態	2.9	蛋白検出の者	2.7	耳疾患	1.8

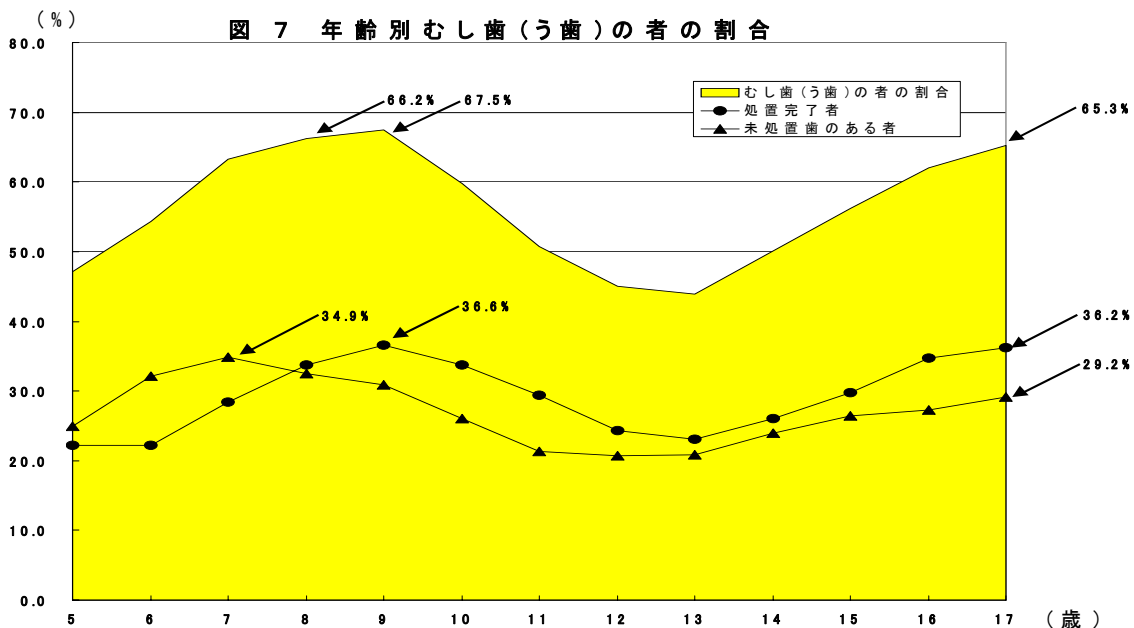
(注) 中学校、高等学校の「裸眼視力1.0未満の者」は、裸眼視力検査が省略される等サンプル数が少ないため公表されていない。

2 主な疾病・異常の状況

(1) むし歯(う歯) (図7, 統計表第2表)

平成20年度の「むし歯(う歯)」の者の割合は、幼稚園47.1%、小学校60.3%、中学校46.3%、高等学校61.1%となっている。

「むし歯(う歯)」の者の割合を年齢別にみると9歳が67.5%と最も高く、次いで8歳が66.2%となっている。また、処置完了者の割合は、8歳以降未処置歯のある者の割合を上回っている。



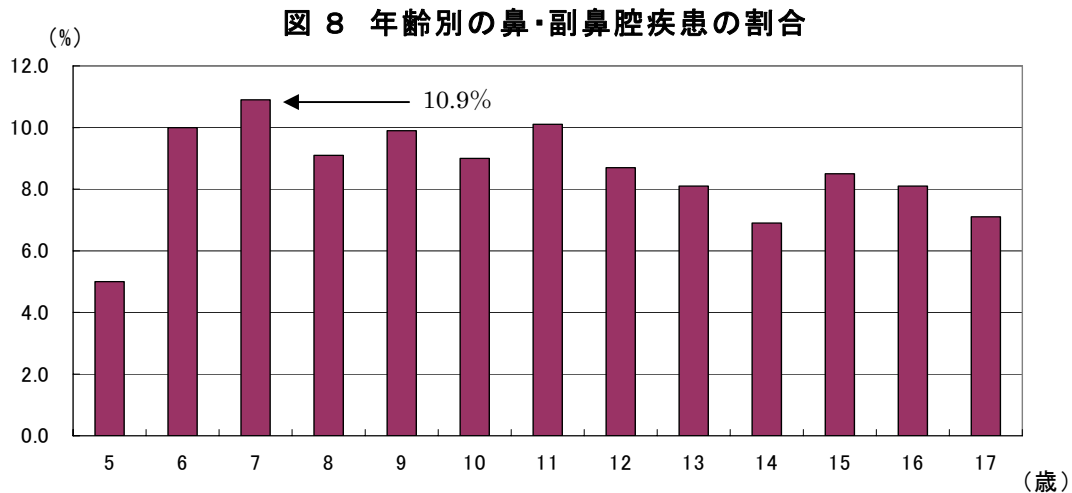
(2) 裸眼視力 1.0 未満の者 (統計表 第 2 表)

平成 20 年度の「裸眼視力 1.0 未満の者」の割合は、幼稚園 16.4%、小学校 28.4% となっている。

(3) 鼻・副鼻腔疾患 (図 8, 統計表 第 2 表)

平成 20 年度の慢性副鼻腔炎 (蓄のう症)、慢性的症状の鼻炎及び花粉症等の鼻・副鼻腔疾患は、幼稚園 5.0%、小学校 9.8%、中学校 7.9%、高等学校 7.9%となっている。

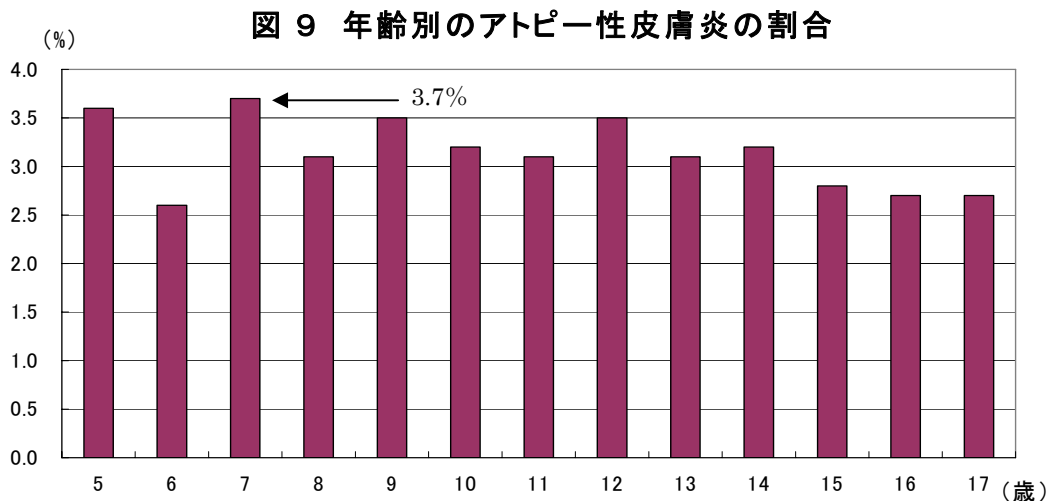
「鼻・副鼻腔疾患」の割合を年齢別にみると、7 歳が 10.9%と最も高く、年齢が進むにつれて低くなる傾向となっている。



(4) アトピー性皮膚炎 (図 9, 統計表 第 2 表)

平成 20 年度の「アトピー性皮膚炎」の割合は、幼稚園 3.6%、小学校 3.2%、中学校 3.2%、高等学校 2.8%となっている。

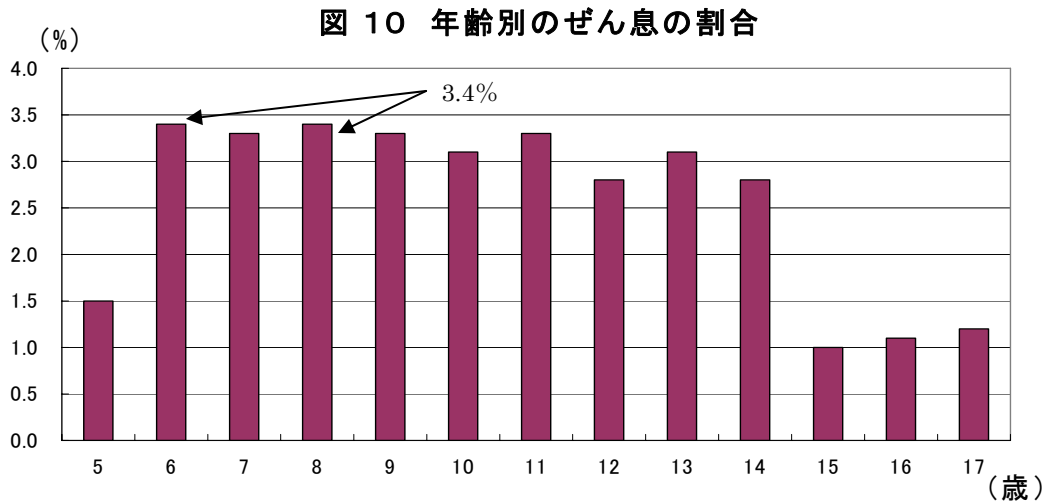
「アトピー性皮膚炎」の割合を年齢別にみると、7 歳が 3.7%と最も高く、年齢が進むにつれて低くなる傾向となっている。



(5) ぜん息 (図10, 統計表第2表)

平成20年度の「ぜん息」の割合は、幼稚園1.5%、小学校3.3%、中学校2.9%、高等学校1.1%となっている。

「ぜん息」の割合を年齢別にみると、6歳と8歳が3.4%と最も高く、年齢が進むにつれて、低くなる傾向となっており、高等学校では1.0%台まで低下している。



3 主な疾病・異常の推移 (表8)

疾病・異常等の主なものについて、平成18年度から20年度までの推移をみると次のとおりである。むし歯(う歯)については、小学校及び中学校で低下しており、鼻・副鼻腔疾患については、幼稚園及び小学校で低下している。

表8 主な疾病・異常等の推移 (単位: %)

検査項目	幼稚園			小学校			中学校			高等学校		
	20年度	19年度	18年度	20年度	19年度	18年度	20年度	19年度	18年度	20年度	19年度	18年度
むし歯(う歯)	47.1	45.4	39.1	60.3	61.9	63.7	46.3	47.6	52.8	61.1	57.2	65.2
裸眼視力1.0未満の者	16.4	X	X	28.4	25.9	27.2	X	36.9	X	X	X	X
鼻・副鼻腔疾患	5.0	5.8	8.2	9.8	11.4	12.3	7.9	9.8	9.7	7.9	8.5	8.3
眼の疾病・異常	3.3	3.2	4.1	5.6	6.6	6.6	4.4	5.3	5.3	5.3	3.5	4.5
耳疾患	2.3	1.3	3.0	3.0	3.5	3.7	2.3	3.7	2.8	1.8	1.6	2.0
ぜん息	1.5	2.3	1.9	3.3	4.3	3.2	2.9	3.2	2.3	1.1	1.4	1.2
歯列・咬合	0.9	2.7	0.5	3.8	4.1	4.3	5.4	5.1	4.6	5.6	3.7	4.2
心電図異常	2.1	2.1	2.3	3.3	3.1	3.4	2.6	2.2	4.8
アトピー性皮膚炎	3.6	2.6	4.0	3.2	3.9	4.6	3.2	4.0	3.1	2.8	2.5	2.4
蛋白検出の者	0.7	0.4	0.9	0.6	0.7	1.0	2.7	2.9	3.4	4.1	2.9	3.5
歯肉の状態	...	0.1	0.2	2.9	2.1	3.5	5.1	5.8	6.6	6.5	6.5	5.6
歯垢の状態	0.1	0.2	0.1	2.7	3.4	3.8	6.0	4.5	5.7	6.9	5.6	6.6
その他の皮膚疾患	1.4	0.4	1.6	0.7	0.5	0.4	0.3	0.2	0.2	0.2	0.1	0.3
口腔咽喉頭疾患・異常	0.5	1.9	0.8	1.7	1.7	1.3	0.4	0.3	0.6	0.2	0.2	0.4

Ⅲ 全国値との比較

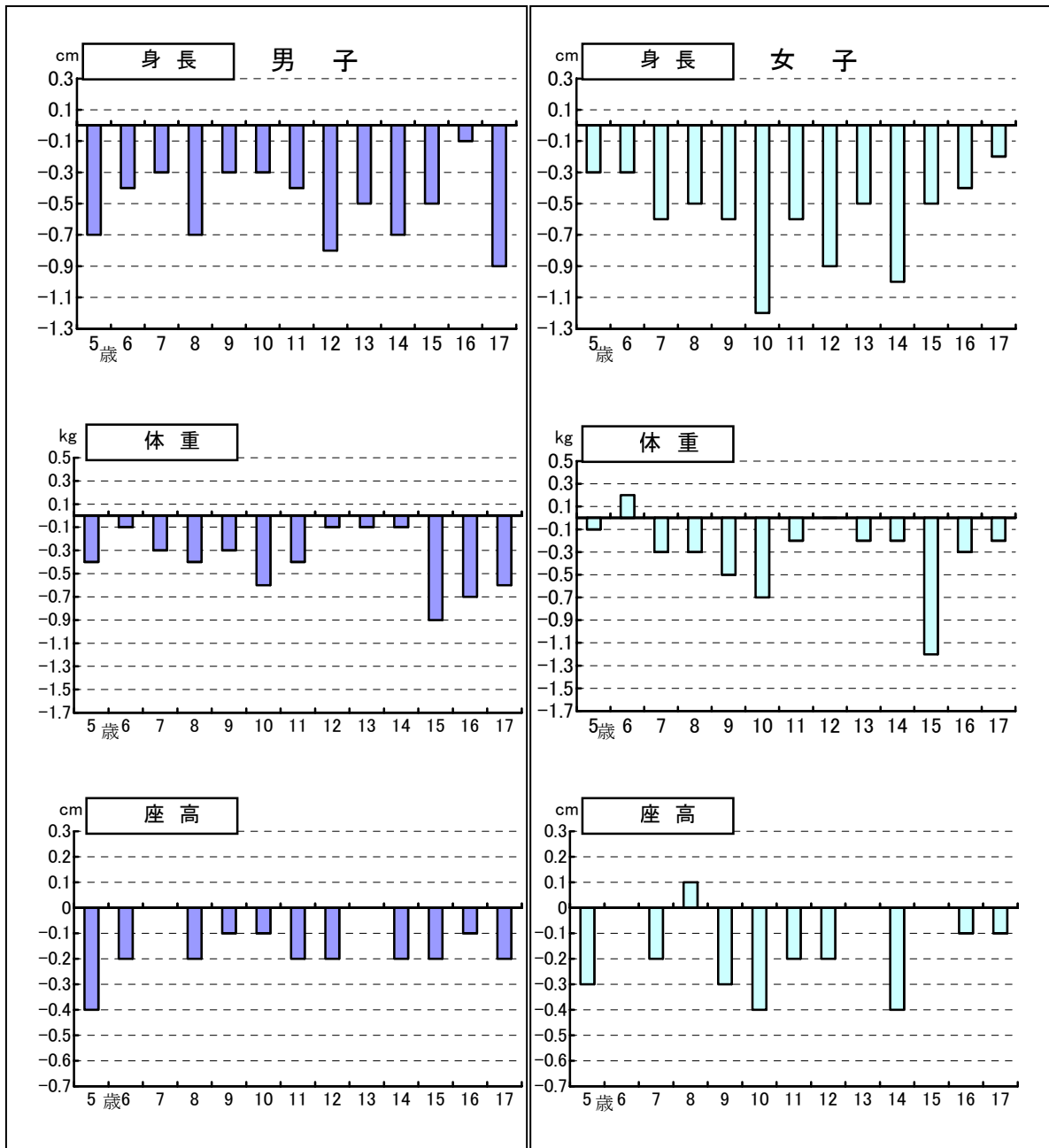
1 発育状態

(1) 全国平均体格との差 (図 1 1)

平成 20 年度の広島県平均値と全国平均値を比較してみると、次のとおりである。
特に身長は、男子、女子ともに各年齢において全国平均値を下回っている。

図 1 1 男女別、年齢別体格の全国平均値との差

(全国平均値=0.0)



(2) 総発育量の全国平均値との比較 (表9)

17歳時(調査対象の最高年齢)の体格から、5歳時(調査対象の最小年齢)の体格を差し引いた総発育量をみると、男子では身長59.4cm、体重43.9kg、座高29.2cmであり、全国平均値よりそれぞれ身長0.5cm、体重0.2kg、座高0.2cm下回っている。

女子の総発育量は、身長48.3cm、体重34.3kg、座高24.0cmであり、全国平均値より身長0.4cm、体重0.1kg上回り、座高は0.1cm下回っている。

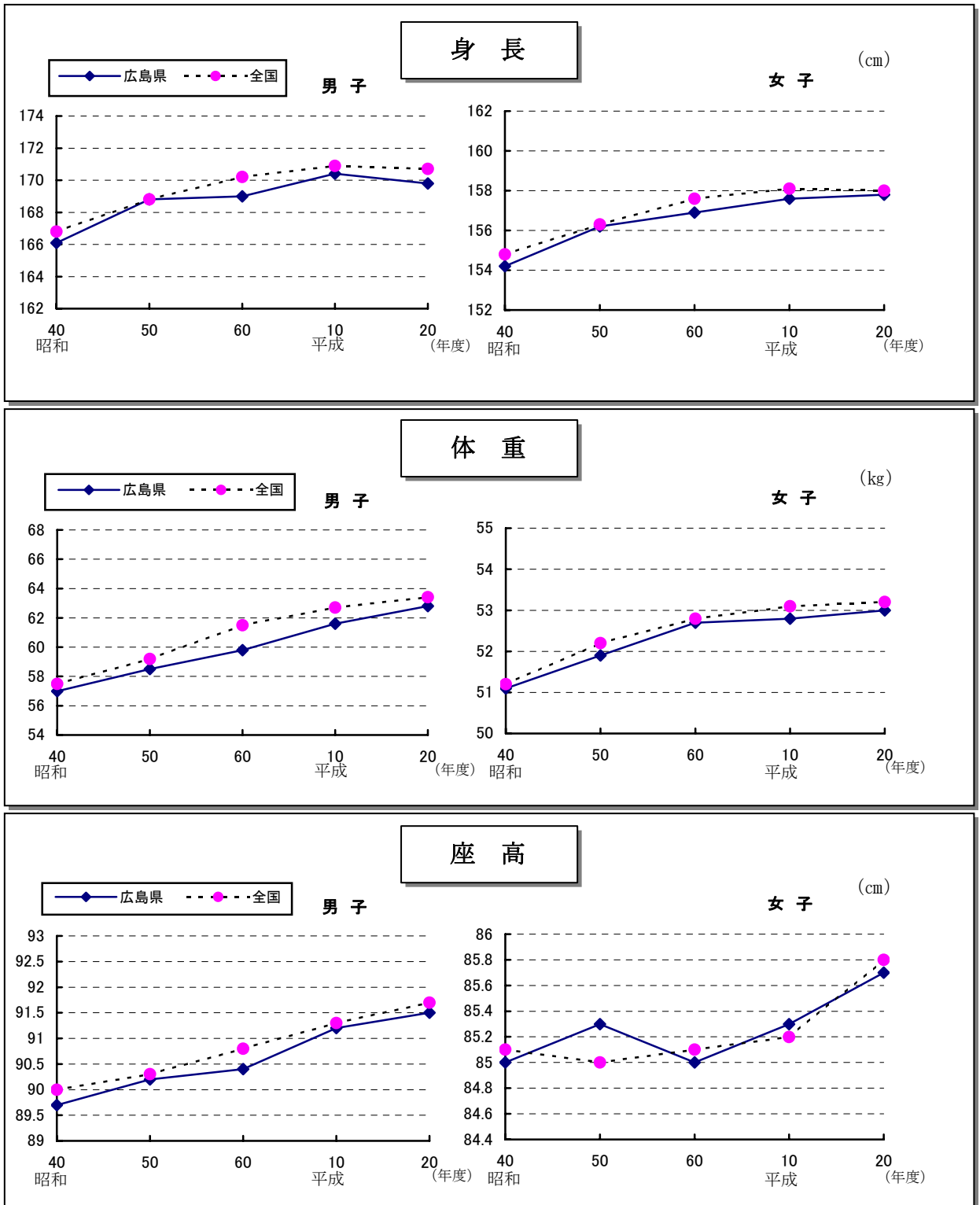
表9 男女別、総発育量の全国平均値との比較

広島県・全国		男子(平成2年度生まれ)			女子(平成2年度生まれ)		
		5歳時の体格 (平成8年度)	17歳時の体格 (平成20年度)	総発育量 B-A	5歳時の体格 (平成8年度)	17歳時の体格 (平成20年度)	総発育量 B-A
		A	B		A	B	
身長 cm	広島県	110.4	169.8	59.4	109.5	157.8	48.3
	全国	110.8	170.7	59.9	110.1	158.0	47.9
体重 kg	広島県	18.9	62.8	43.9	18.7	53.0	34.3
	全国	19.3	63.4	44.1	19.0	53.2	34.2
座高 cm	広島県	62.3	91.5	29.2	61.7	85.7	24.0
	全国	62.3	91.7	29.4	61.7	85.8	24.1

(3) 17歳男女平均値の推移 (図12)

17歳男女における身長、体重、座高(平均値)の推移を昭和40年からみると、昭和50年の男子身長及び女子座高を除くすべてにおいて、全国平均値を下回って推移している。

図12 17歳男女平均値の推移



(4) 肥満傾向児・痩身傾向児の全国出現率との比較

ア 肥満傾向児 (図13, 図14)

肥満傾向児について、年齢別に全国出現率と比較してみると、男子については、12歳～14歳，17歳において、女子については、5歳～7歳，12歳～14歳において上回っている。

図13 年齢別肥満傾向児の全国出現率との比較 (男子)

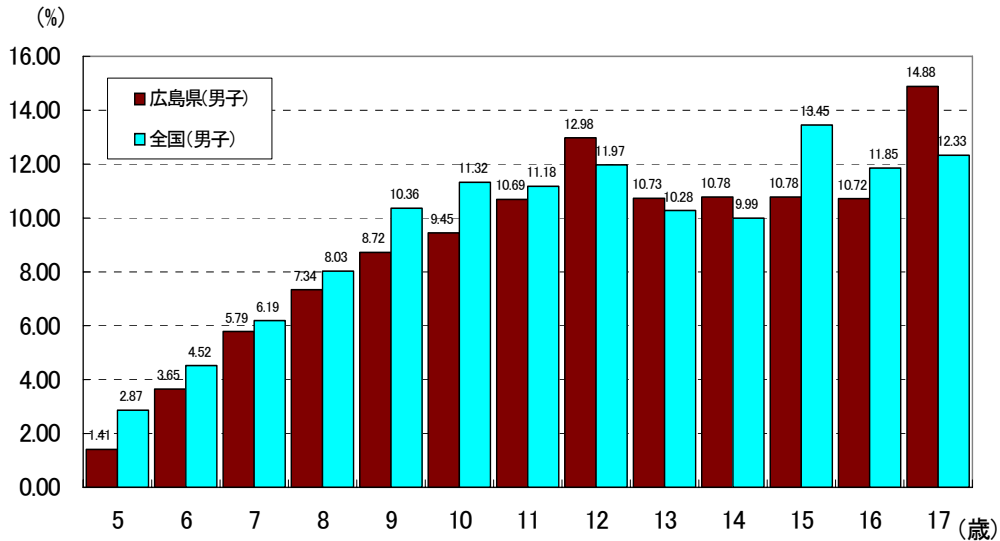
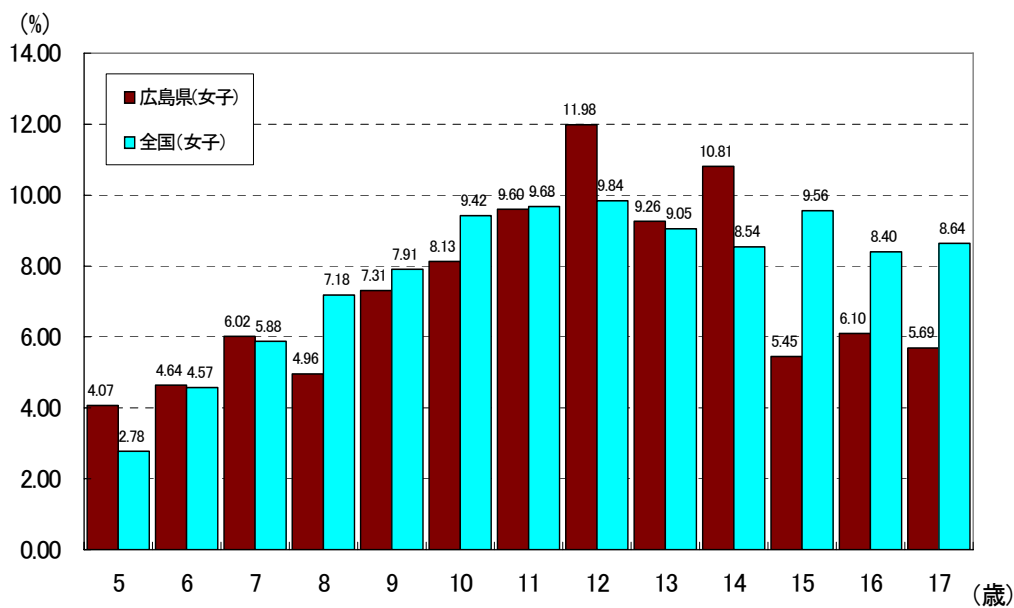


図14 年齢別肥満傾向児の全国出現率との比較 (女子)



イ 痩身傾向児 (図15, 図16)

年齢別に痩身傾向児の全国出現率と比較してみると、男子については、9歳、10歳、13歳、14歳、16歳において上回っている。

女子については、7歳で上回っているものの、それ以外の年齢では全国出現率より低い状況にある。

図15 年齢別痩身傾向児の全国出現率との比較 (男子)

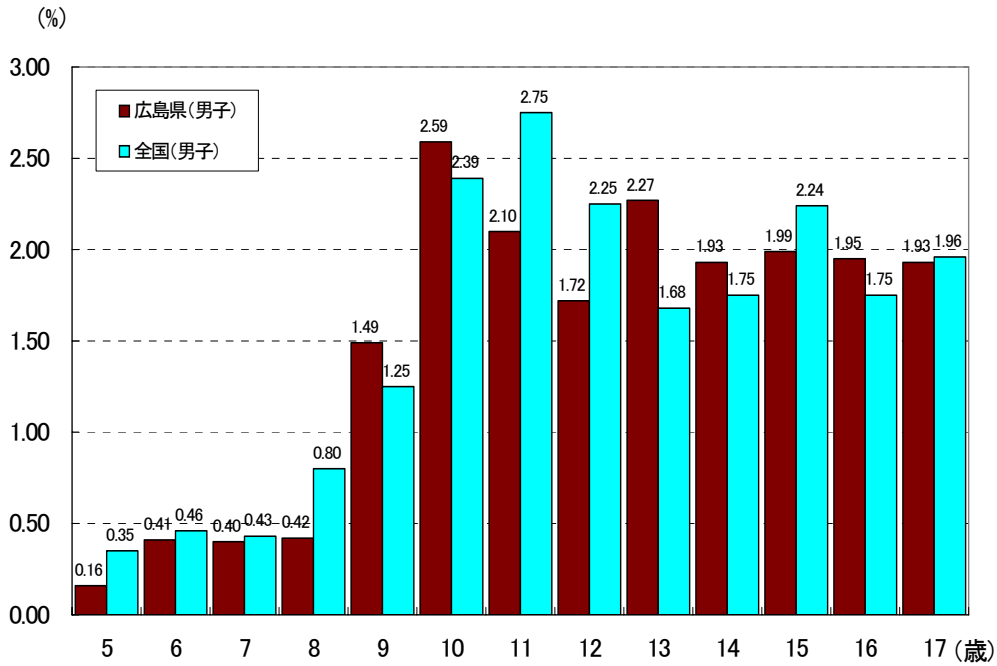
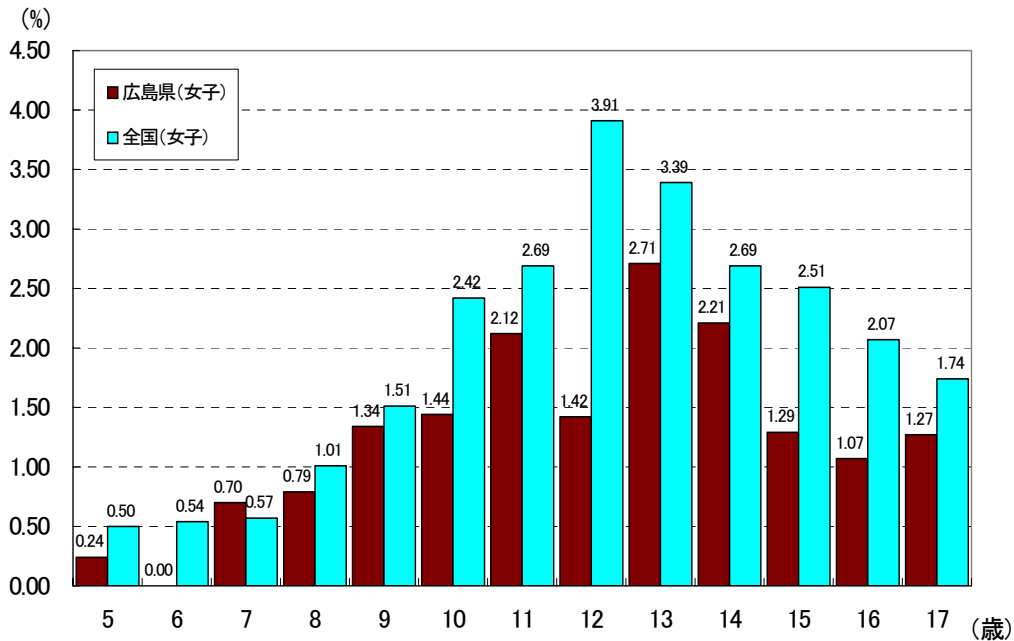


図16 年齢別痩身傾向児の全国出現率との比較 (女子)



2 健康状態 (図17, 図18, 図19, 図20, 図21)

主な疾病・異常の被患率について、全国と比較してみると「むし歯（う歯）」の者の割合は、いずれの学校段階においても全国を下回っており、特に中学校においては9.7ポイントと、大きく下回っている。

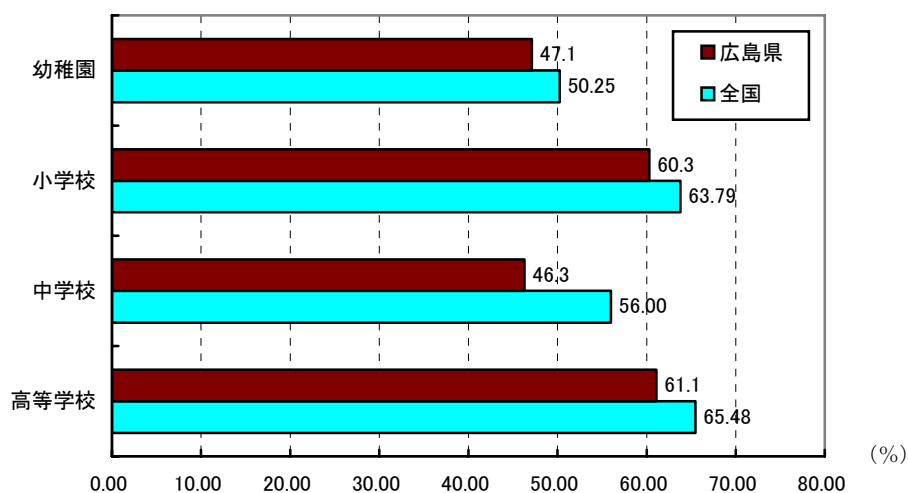
「裸眼視力1.0未満の者」の割合は、幼稚園、小学校ともに全国を下回っている。

「鼻・副鼻腔疾患」の被患率は、幼稚園を除く小学校、中学校及び高等学校が全国を下回っている。

「アトピー性皮膚炎」の被患率は、小学校を除く幼稚園、中学校及び高等学校において全国を上回っている。

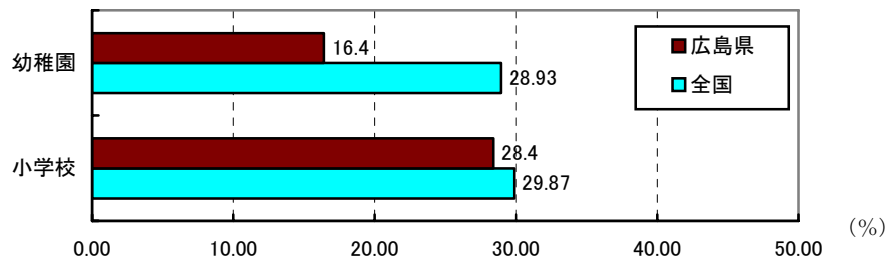
「ぜん息」の被患率は、いずれの学校段階においても全国を下回っている。

図17 むし歯（う歯）の者の割合 (全国との比較)



(注) 被患率等の標準誤差の大きさにより、全国数値は小数点第2位まで、広島県数値は小数点第1位までを表示している。(図21まで同様とする)

図18 裸眼視力1.0未満の者の割合 (全国との比較)



(注) 中学校、高等学校の「裸眼視力1.0未満の者」は、裸眼視力検査が省略される等サンプル数が少ないため公表されていない。

図 19 鼻・副鼻腔疾患の被患率 (全国との比較)

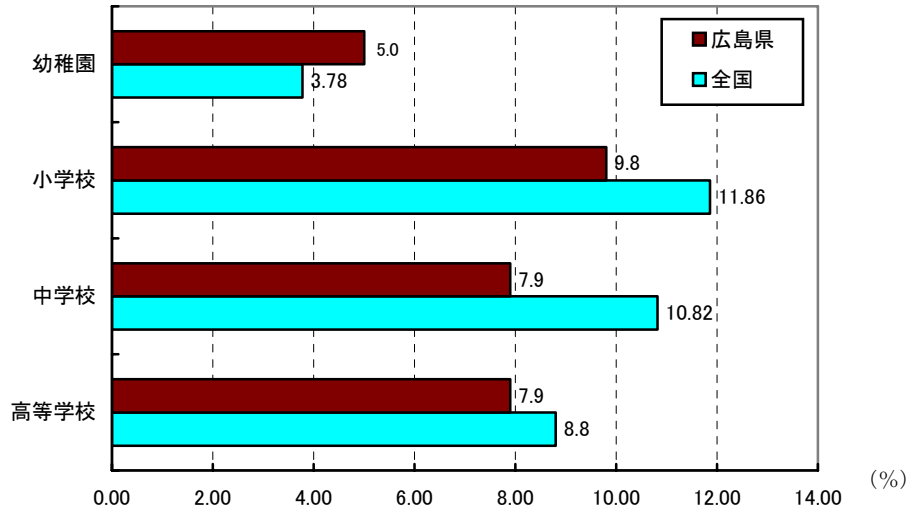


図 20 アトピー性皮膚炎の被患率 (全国との比較)

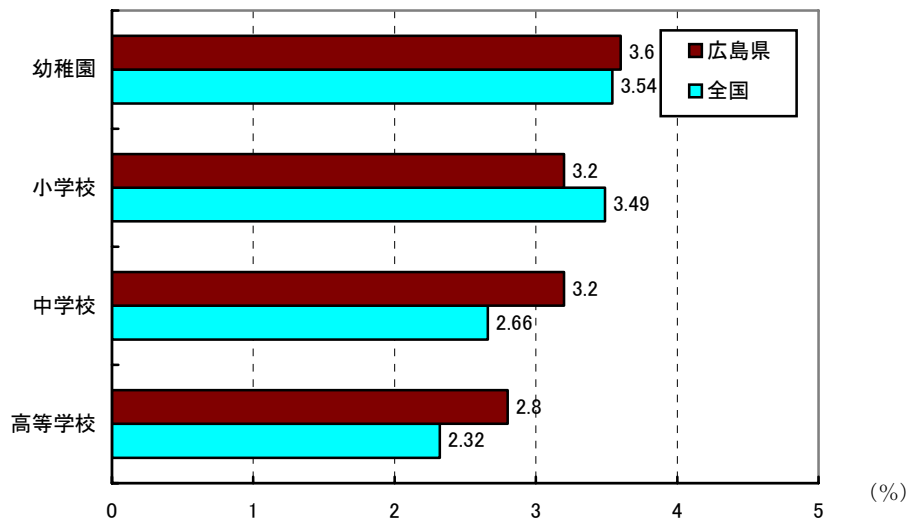


図 21 ぜん息の被患率 (全国との比較)

